



イネ縞葉枯病の育苗箱施薬による防除

県病害虫防除所によると、本年2~3月に行ったイネ縞葉枯ウイルス（RSV）保毒虫率調査で、16地点中8地点で保毒虫率が5%以上※の高い値となりました。このため、3月21日付で

病害虫速報 (<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou/yosatsujoho/documents/sokuhour5-3.pdf>)

「イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率が高い地点が認められています！」

総合防除によるヒメトビウンカの防除を徹底しましょう」を公表しています。

① 県西地域や県南・県央の一部地域・既に縞葉枯病が発生している水田および周囲で本病が発生している水田

下記を参考に、田植前に育苗箱施用を実施して、媒介虫ヒメトビウンカの防除を行ってください。

② 前年、育苗箱施用を行っても発病が多かった地域

田植前の育苗箱施用を実施したうえ、6月中下旬に（防除適期については、今後、防除所より発表されます）ヒメトビウンカ幼虫を対象とした薬剤の本田防除も行ってください。なお、育苗箱施用と本田防除の体系防除を行う場合には、ヒメトビウンカの薬剤抵抗性発達を抑えるため、箱施薬と本田防除で分類（IRACコード）の異なる薬剤を使用してください。

※茨城県農業総合センター農業研究所で作成したイネ縞葉枯病防除マニュアルでは、保毒虫率5%以上を育苗箱施用等による薬剤防除を推奨する基準としています。

防除対策

＜耕種的防除＞本田における発病株の抜き取りやヒコバエ（再生イネ）の早期耕起、水田周辺のイネ科雑草の除草などを励行し、ウイルスの伝染源やヒメトビウンカ生息密度を常に低く抑制しておきます。

＜化学的防除＞ウイルスの媒介虫ヒメトビウンカを対象に、育苗箱に殺虫剤を施用することが最も重要です。なお、育苗箱施用を行わない場合や行っても前年に発病が多かった地域は、本田防除として第二世代幼虫を対象に6月中下旬頃に薬剤防除を実施します。

表1 ヒメトビウンカ（ウンカ類）防除の主な水稻育苗箱施薬剤

（令和6年3月26日現在）

薬剤名		使用時期 / 使用回数	IRAC	対象病害	高密度播種に対応	FRAC
殺虫剤	フェルテラゼクサロン箱粒剤	播種時（覆土前）～移植当日 / 1回	28と4E	—	○	—
	ゼクサロンパディート箱粒剤	播種時（覆土前）～移植当日 / 1回				
	アドマイヤーCR箱粒剤	播種時（覆土前）～移植当日 / 1回	4A			
	フェルテラチェス箱粒剤	移植3日前～移植当日 または播種時（覆土前）～移植当日 / 1回	28と9B		○ ×	
殺虫殺菌剤	防人箱粒剤	播種時（覆土前）～移植当日 / 1回	28と4E	いもち病・もみ枯細菌病など	○	P3
	スクラム箱粒剤	移植3日前～移植当日 または播種時（覆土前）～移植当日 / 1回	28と4E	いもち病、紋枯病など	○ ×	7とP3
	フルスロトル箱粒剤	播種時（覆土前）～移植当日 / 1回	28と4E	いもち病、紋枯病など	×	7とP3

注1) 使用方法については、薬剤ごとのラベルで必ず確認してください。使用量については、1箱当たり50g使用の他に高密度に播種する場合は1kg/10a使用（育苗箱1箱当たり50~100gの使用）があります。

注2) 縞葉枯病以外に、いもち病や紋枯病の常発地では、殺虫殺菌剤が有効です。

注3) IRACおよびFRACコードを記載しました。同一分類（コード）は作用点が同じなので、連用は避けてください。

各薬剤の取り扱いについては、お近くの農協に問い合わせください。

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 News は JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。